

オウトウの品種開発と産地形成の戦略

西村 幸一

(山形県立園芸試験場育種部)

History of Cherry Breeding in Japan and the Cherry Production in Yamagata Prefecture

Koichi NISHIMURA

(Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station)

1. はじめに

我が国におけるオウトウ栽培の歴史は、明治の初頭に欧米より導入されたことから始まる。オウトウは、ビワと共に初夏を代表する果物として親しまれているが、現在のように生食用主体の生産となったのは、昭和40年代後半からであり、年月はまだ浅い。

平成7年度における全国の栽培面積は3,850haであり、内山形県が61.3%を占め、果樹の中でも収益性の高い作物として、年々増加する傾向にある。

ここではオウトウ栽培の歴史的な変遷について概要を紹介し、山形県におけるオウトウの品種開発と産地の現状を中心として、今後の課題等について述べる。

2. オウトウ育種の歴史と現状

(1) 品種の導入

我が国にオウトウが導入されたのは、明治元年にドイツ人ガントネルが北海道へ持ち込んだのが最初といわれている。しかし、本格的な導入は、勸業寮が明治7年(1874)に欧米諸国から多数の品種を求めて、主に北海道や東北地域に配布・栽培をさせた。その後、山形県立農事試験場が、明

治41年(1908)に米国及びフランスから39品種、大正4年に米国から9品種、大正11, 12年にはイギリスから18品種を導入している記録がある⁴⁾。

当時は、県や地域によってオウトウの名称がバラバラであったため、明治43, 44年(1910, 1911)に「桜桃品種名称一定会」が開かれ、主要導入品種に日本名を付けて統一したとされている²⁾、³⁾。この中には「那翁」(Napoleon Bigarreau)、「高砂」(Rockport Bigarreau)、「日の出」(Early Purple Guigne)等、現在も馴染みのある品種が含まれている。

一方、農商務省は明治41年(1908)から補助金を出して、山形県農事試験場で品種試験を実施し、さらに、大正7年(1918)からは委託試験として拡大した(山形県農事試験場史)。この中で、早生種:「ビガロージャボレー」(Bigarreau Jabouley)、「黄玉」(Governer Wood)、中生種:「クリーブランド」(Cleveland Bigarreau)、「エルトン」(Elton)、「大紫」(Black Tartalian)、晩生種:「ナポレオン」(Napoleon Bigarreau)、「センテニアル」(Centenial)、「ピング」(Bing)、「ランバート」(Lambart)の9品種を優良品種としている⁷⁾。

(2) 戦前の育成品種

上述のように、明治以来から栽培されてきた我

が国のオウトウの品種は、殆どが導入品種であり、研究面もこれらの選抜試験が主流であった。

我が国最初の育成品種は、北海道の小樽で育成された「北光」であり、明治44年(1911)に命名されている。これは、中生の白肉種で、裂果発生が少ない品種であり、北海道では「水門」の名称で現在も栽培されている。また、昭和3年(1928)には「佐藤錦」が育成、命名され、これは白肉の中生種で、食味、外観が良好なことから、現在では、生食用の主要品種となっている。

(3) 戦後の育成品種

戦後の品種育成も民間が中心であり、山形県では「蔵王錦」、「天香錦」、「陽光」等が育成されている(表-1)。

国・公立試験研究機関による初の育成品種は、「南陽」と「旭光」であり、これらは、山形県立農業試験場置賜分場が、昭和34年(1959)から始めたオウトウ品種育成試験の成果である。「南陽」は、昭和53年(1978)に種苗名称登録された白肉の中晩生種で、肉質、食味の良好な品種である。しかし、山形県では開花期が遅く、結実が不安定なためあまり栽培されず、開花期の揃う北海

道で主に栽培されている。

(4) 新種苗法以降の育成品種

昭和53年(1978)に新種苗法が施行され、品種登録要件が、これまでの優秀性から特異性が重視されるようになった。これに伴って、品種登録数は急増し、平成9年2月現在で32品種になっている(表-2)。これらの品種中には、早生の優良品種や10g以上にもなる大果なものも含まれており、育種素材としても有望なものがある。ただし、現在の品種登録は、前述のように必ずしも優秀性を意味してはいないので、導入に当たっては十分な検討が必要である。

これらの品種の育成地をみると、山形県を主体に青森県、福島県、山梨県、長野県と広範である。また、公立試験研究機関によるオウトウの育種も、現在では当場以外に北海道中央農業試験場、山梨県果樹試験場で進められており、新たに計画している場所もある。

以上のように、最近是国内育成品種も数多くなったが、オウトウ品種の変遷を見ると(表-3)、ようやく国内の育成品種が栽培されるようになったところであり、今後は急激に品種構成も

表-1 新種苗法以前の国内育成品種

品種名	育成者(育成地)	交雑親	命名年度	特性概要
北光	(北海道)	偶発実生	明治44(1911)	中生、豊産性、裂果小
佐藤錦	佐藤栄助(山形)	ナポレオン×黄玉	昭和3(1928)	中生、食味、品質良
蔵王錦*	(山形)	偶発実生	昭和35(1960)	中生、豊産性、果肉軟
南陽*	山形園試(山形)	ナポレオンO.P.	昭和53(1978)	晩生、大玉、食味良
天香錦	(山形)	偶発実生	昭和40(1965)	中晩生、果肉硬、豊産性
陽光	(山形)	偶発実生	昭和40(1965)	晩生、やや大玉、着色良
ひかり	(山形)	偶発実生	昭和42(1967)	中生、やや大玉
おばこ	(山形)	偶発実生	昭和44(1969)	中生、中玉、肉軟
旭光	山形園試(山形)	ナポレオンO.P.	昭和51(1976)	赤肉、中生、大玉、肉硬

備考：*は農産種苗法登録品種

表一 2 新種苗法におけるオウトウ・台木育成品種の概要

品種名	育成者(育成地)	交 雑 親	命名年度	特 性 概 要
1 羽陽ことぶき	近野 徳壽(山形)	偶発実生	S 58(1983)	早生、裂果少
香夏錦	佐藤 正光(福島)	佐藤錦×高砂	S 59(1984)	早生、結実良、肉軟
コルト	H.M.Tydeman(英国)	F299/2× <i>P. pseudocerasus</i> Lind.	S 60(1985)	オウトウ台木
ジャンボ錦	木村 コヨ(青森)	偶発実生	S 60(1985)	早生、北光に似て裂果少ない
5 豊 錦	斉藤 一博(長野)	偶発実生	S 61(1986)	早生、肉軟、酸味少
東香錦	武田茂太郎(山形)	ナポレオンO.P.	S 61(1986)	晩生、肉硬、
光 麗	小沢 光男(長野)	偶発実生	S 61(1986)	晩生、肉硬、酸味少
弘 寿	小関 弘二(山形)	偶発実生	S 61(1986)	早生、外観良、酸味強
正光錦	佐藤 正光(福島)	香夏錦O.P.?	S 62(1987)	早生、結実良、肉軟
10まさみ	保坂 正巳(山梨)	高砂の枝変わり	S 62(1987)	中生、着色良、果肉乳白色
瑞 光	渡辺 富多(山形)	偶発実生	S 62(1987)	早生、酸味少、甘味多
陽 峰	山野井英幸(北海道)	偶発実生	S 62(1987)	極晩生、果実極大
桜頂錦	田中清一郎(山形)	偶発実生	S 63(1988)	早生、外観、食味良
夕紅錦	菊地堅治郎(山形)	偶発実生	S 63(1988)	中生、ナポに似た甘さ
15ダイヤナブライ	佐藤光之助(山形)	偶発実生	S 63(1988)	中晩生、大果
高陽錦	高橋庄次郎(山形)	偶発実生	H 1 (1989)	極晩生、食味濃厚
大将錦	加藤 勇(山形)	偶発実生	H 2 (1990)	極晩生、大果、肉硬
コ ブ	H.M.Tydeman(英国)	<i>P. avium</i> L. × <i>P. pseudocerasus</i> Lind.	H 3 (1991)	オウトウ台木
八興錦	今田興一郎(山形)	佐藤錦×ジャボレー	H 3 (1991)	中生、着色良、酸味少
20紅さやか	山 形 県	佐藤錦×セネカ	H 3 (1991)	早生、赤肉、結実良
紅秀峰	山 形 県	佐藤錦×天香錦	H 3 (1991)	中晩生、大果、高品質
キラーズ	芳賀 滎(山形)	ジャボレー×ナポレオン	H 5 (1993)	早生、着色良
マドンナの瞳	斉藤 善雄(山形)	ナポレオンの枝変わり	H 6 (1994)	中生、着色良、肉軟
みよし	菅野 但夫(福島)	佐藤錦×高砂	H 6 (1994)	早生、果肉硬さ中
25ミス平成	西村 忠志(青森)	偶発実生	H 7 (1995)	中生、結実良、酸多
紅真珠	西村 忠志(青森)	偶発実生	H 7 (1995)	中生、結実良
今田錦	今田興一郎(山形)	ナポレオン×ジャボレー	H 7 (1995)	中晩生、果皮着色良、酸多
秀雅錦	遠藤 庄太(山形)	高社錦×佐藤錦	H 7 (1995)	早生、軟肉、裂果少
さおり	雨宮 正明(山梨)	高砂の枝変わり	H 7 (1995)	晩生、大果、結実良
30芳香錦	永野 芳男(静岡)	サクラO.P.	H 8 (1996)	オウトウ台木
あずまわせ	東條 益雄(山梨)	サクラO.P.	H 8 (1996)	オウトウ台木
スーパー6	岡田 誠(山形)	コルト倍数体	H 9 (1997)	オウトウ台木

備考：登録申請資料等より作成

表一 3 オウトウ主要品種の変遷

年次及び出典	主 要 品 種
明治42年(1907) (果樹及び蔬菜品種一覧表 農商務省農事試)	エルトン、ガバナーウッド、ビガローグラン、イエロースパニシュ、ピ ガローナポレオン、ブラックタータリアン、メイデューク、モンモレン シー
大正7年(1918) (オウトウ品種試験成績山 形農事試)	ビガロージャボレー、ガバナーウッド、クリーブランドビガロー、エル トン、ブラックタータリアン、ナポレオンビガロー、センテナアル、ピ ング、ランバート
昭和11年(1936) (全国) (蔬菜及び果樹主要品種の 分布調査、農林省農務局)	ナポレオン(46.5)、黄玉(25.2)、日の出(8.0)、大紫(3.0)、北光、養老、 ジャボレー、フローレンス、支那オウトウ
昭和32年(1957) (山形県資料)	ナポレオン(75)、黄玉(8)、日の出(3)、佐藤錦(7)、ジャボレー(5)、そ の他(2)
昭和43年(1968) (山形県資料)	ナポレオン(84.2)、佐藤錦(9.9)、高砂(1.5)、その他(4.4)
昭和55年(1980) (全国) (農水省果樹花き課)	ナポレオン(51.4)、佐藤錦(24.9)、北光(9.9)、高砂(6.6)、その他(7.2)
平成7年(1995) (全国)	佐藤錦(54.0)、ナポレオン(18.0)、高砂(8.9)、北光(6.6)、南陽(3.4)、 その他(9.1)

備考：() 内の数字は全栽培面積にしめる割合(%)。

変化していくものと思われる。

(5) 山形県におけるオウトウの品種開発

1) 山形県での育成品種

山形県における品種の育成は前述のように、昭和3年(1928)の「佐藤錦」を初めとして、民間が中心であった。公立試験研究機関における品種開発は、昭和34年(1959)から山形県立農業試験場置賜分場において開始され、この中で「南陽」と「旭光」の2品種が育成されている。その後、オウトウの育成は、山形県立園芸試験場において実施し、「紅秀峰」と「紅さやか」の2品種が育成された。さらに、昭和63年(1988)から

は国の指定試験事業を受け、体系的な育種が行われることとなり、これに伴い海外からの導入品種も増加し、現在の品種・系統数は200個体以上を有している。平成9年(1997)3月には、指定試験開始後、初の「山形C5号」を登録申請した。

2) 育種目標と現状

オウトウ栽培は、他の樹種に比べて特有の問題があることから、育種目標も他の樹種と異なる場合が多い。

ア) 育種目標

山形県立園芸試験場では、育種目標として下記の10課題を挙げ、当面の課題を①、②、③、④

としている。

- ① 各熟期別優良品種の育成
- ② 大玉品種
- ③ 結実の安定性
- ④ 日持ち性
- ⑤ わい化性
- ⑥ 自家和合性
- ⑦ 裂果抵抗性
- ⑧ 病害抵抗性
- ⑨ 優良台木
- ⑩ 低温抵抗性

イ) 短期的課題

当场で育成した「紅秀峰」と「山形C5号」は、「佐藤錦」に比較して優れた点が多く、晩生種については、①から④の目標を満たしているといえる。ただし、「佐藤錦」以前の早生系統では、軟肉のものが多く、まだ白肉系統の優良品種は育成されていない現状である。現在の選抜系統の中には、品質が「佐藤錦」並で、数日から1週間程度の早生個体が数種選抜されており、期待しているところである。

ウ) 中長期的課題

中長期的な課題のうち⑤のわい化性は、各国共通の課題であり、⑨の優良台木の開発と共に様々な取り組みがなされ、外国ではわい化性の品種も育成されている(表-4)。当场の交雑実生の中にも、「レーニア」等の後代からコンパクトタイプの個体や節間の詰まった個体が見出されている。⑨の優良台木については、当场では各種サクラ類を用いてわい性台木の選抜を実施し、里桜の一種であるタイザンフクンを実用化技術として開発してきたところである。

昭和63年(1988)からは、オウトウの優良台木の育種として、挿木発根性の良好な台木の育成を目標に、サクラ属を用いて数多くの種間雑種を

育成してきた。現在、これらの中から挿木発根性の良好な20系統程を選抜し、接木親和性、特性検定を進めている。

欧州では、台木育成への取り組みが早くからなされ、イギリスのイーストモーリング試験場で育成された「コルト」は、我が国でもなじみが深い。また、西ドイツのギーセン大学では、種間雑種をもとにした取り組みがあり、ベルギーのGembloux研究所では、わい性台木の育成を目的とて台木開発を行い、GMシリーズとしてInmil, Damil等のいくつかの系統を選抜している⁶⁾。一方、フランスでは、INRAのM.Thomasにより「マハレブ」の実生から「S L 64」(Saint Lucie)を育成し、穂品種の接木特性を調査している⁵⁾。これらの一部については、当场にも導入して試験中である。結果の詳細については、まだ明らかでないが、我が国の土壌では、総体的に生育が旺盛になるようである。

⑥の自家和合性については、当场では「コンパクトステラ」を用いて、自家和合性を有する個体を獲得している。自家和合性を有する個体は、F₁で実生が得られるので実生の獲得は容易であるが、「コンパクトステラ」そのものの品質が我が国での嗜好レベルに至らないため、さらに代を進めて検討する必要がある。一方、カナダからの導入系統には、比較的品質の優れたものがあり、その中には白肉系統も含まれているので、これらを用いた後代に期待している。

⑦の裂果抵抗性もオウトウ栽培上の大きな課題であり、欧米では様々な品種が育成されている(表-4)。我が国でも「北光(水門)」は、昔から裂果しにくい品種として知られており、また、北海道で栽培されている「蜜」や山形の「おぼこ」等も通常の品種に比較して裂果耐性が認められている。しかし、これらの品種はいずれも軟肉タイプ

表-4 甘果オウトウにおける主要形質と育成品種(A. Iezzoniら(1991)¹⁾より主要特性・品種を抜粋)

特性	品種・系統名	由来、特徴(出典)
早成り性	Van	(Fogle, 1961)
	Merton Glory	(Matthews, 1973a, b)
	Napoleon	(M. C. Tabuenca, pers. comm.)
	Sunburst, Lapins	(R. Saunier et al., 1987a, 1987b)
わい化性	Emperor Francis B., Governer Wood	選抜(Grubb, 1949)
	Burlat CL	半わい性、突然変異(I. S. F. and ENEA-Rome, 1983)
	Lambert Compact	わい性、突然変異(Lapins, 1973)
	Garden Bing	わい性、枝変わり(F. Zaiger, pers. comm.)
	Starkrimson	わい性、交雑種(F. Zaiger, pers. comm.)
自家結実性	Stella	交雑実生(Lambert×JI 2420)
	Stella Compact	突然変異(Lapins, 1975)
	Starkrimson	交雑実生(Stella×Garden Bing)
	Sunburst, Lapins	交雑実生(Van×Stella)
	Vineland:69061, 69062他	交雑実生(Van×Stella)
果実特性	Van	大果、硬さ、高品質(Fogle, 1961)
	Merton Glory	大果、高品質(Matthews, 1973a, b)
	Moreau	硬さ(Brown and Bourne, 1988)
	Gil Peck	硬さ、高品質(Fogle, 1961)
	Summit	大果(Cossio, 1985)
	Bing	貯蔵性、輸送適性(T. Bohlmann, pers. comm)
裂果耐性	Sue	(Zielinski, 1964)
	Ealy Rivers	(Gautier, 1970)
	Sam	(Cossio, 1985)
	Kristin	(Ystaas et al., 1982)
	Bada	(Christensen, 1983)
	Sunburst, Lapins	(Sansavini and Lane, 1983)
	Kordia	(W. Fehrmann, pers. comm.)
機械収穫 (果梗なし)	Vittoria	(Bargioni, 1970)
	Corinna, Francesca	(Bargioni, 1988)
	Benedetta, Carlotta	(Roselli, 1979; Roselli et al., 1984)
	Sandra Precoce, Karesova	(Testoni and Albertini, 1982)
(果梗付き)	Izumnaya, Trusenszkaya2	R. Way, pers. comm.
	Durona di Cesena	Baldini et al., 1980
	Schneider's Spate	A. Albertini, pers. comm.

であり、硬肉タイプで裂果抵抗性を持つ品種は、見あたらない現状である。海外の事例では、「Kristin」⁸⁾等が裂果抵抗性品種として発表されているが、当場の栽培結果からは、雨除けテントのない条件では、耐裂果性の結果が十分でなかった。裂果性については、極めて重要な課題であるので、関連成果の導入と当場における結果をもとにして、さらに検討を進める必要がある。

⑧の病害抵抗性については灰星病が主体となるが、この病害に対する抵抗性母本が見つからない現状にある。そのため、交雑母本の探索や育成選抜から開始する必要がある、かなり年数を要する課題である。

3) 今後のオウトウ育種の課題

我が国におけるオウトウの育種はまだ日も浅く、組織だった研究は開始したばかりの状況で、海外での自家和合性、耐病性、台木等の研究成果からみれば、だいぶ立ち遅れているともいえる。ただし、最近は国の協力等により、自家結実系統や裂果抵抗性品種の一部が導入され、これらの利用が可能となった。しかし、今後の種苗法の改正等によって、制限がますます厳しくなることも予想されるが、成果や技術等を積極的に導入していくことが必要である。また、我が国のオウトウは白肉種が主体であるが、ルーツをたどれば欧米産のオウトウにたどり着き、育種上からは、海外の品種を導入しても変異幅が狭いといえる。

多様なオウトウ育種のためには、変異幅の拡大が極めて重要な要素であり、このためには、遺伝資源の導入を始めとして、現在、実施しているガンマー線照射による突然変異の誘発や台木で実施している近縁種のサクランボ類との種間交雑による特異形質の獲得等の研究を充実する必要がある。オウトウの果実については、プラム類等の近縁種との種間交雑も有効と考えられ、また、バイオテク

用による変異拡大についても、研究の進行によって発展性が期待される。

3. オウトウ産地の歴史と現状

(1) 山形県におけるオウトウ栽培の歴史

山形県のオウトウ栽培は、明治7年(1875)に内務省勸業寮より苗木の配布を受け、翌8年(1876)に県庁の庭園に植栽されたのが始まりといわれる。

「本県の桜桃が、全国の首位の座を占める名果になった原因には、歴史的な経過もあるが、その基本をなしたものは、まず、本県の気候風土が桜桃の栽培に好適であることを挙げなければならない」(山形県史)とある。当初、オウトウは全国的に試作されたが、開花期の霜害や収穫期の降雨による実割れ等のため、ほとんどが失敗し、霜害と台風の被害の少ない本県が好成績を挙げている。

その後、栽培熱が高まり、明治21年(1888)以降には、オウトウを仙台市場に出荷する人もあったというが、本格的な商品性が出たのは、奥羽線開通以降である。このころになると、一般の食生活の中にも果物の需要が漸増し、輸送の便と相俟って山形、米沢付近において栽培が普及した。当時の品種では「ナポレオン」が好評で、「黄玉」、「若紫」、「日の出」などが続いたという(山形県史)。

1) 第2次大戦前のオウトウ栽培

県内の、戦前までのオウトウ生産の推移は、明治30年(1897)では29tであったが、明治31年(1898)の奥羽線開通後は生産量が著しく増大し、県外出荷が行われ、大正14年(1925)では1,700t、昭和8年(1933)では2,150t(戦前最高)の生産量をみた。

2) 第2次大戦後のオウトウ栽培

第2次世界大戦時の強制伐採により、オウトウの栽培面積は激減し、戦前のレベルに回復したのは昭和31年（1956）であった。その後、加工工場の増加と共に栽培面積も著しく増大しており、県内のオウトウ栽培は加工用を主体としたものであった。しかし、昭和40年代後期のオイルショックやチクロ問題等により、加工用の需要が激減したことを機に、生食用栽培の比率が高まった。また、米の生産調整に伴う減反政策の転換作物としてオウトウが取り入れられたことも栽培面積を増加させた一要因である。

一方、昭和53年（1978）からのオウトウの段階的輸入制限緩和により、米国産オウトウの輸入が開始され、昭和59年（1984）にはカナダ産、60年（1985）にはニュージーランド産のオウトウが輸入解禁となった。平成4年（1992）からは、輸入期間の制限も撤廃され、完全な自由化となって

外国産との競合は一層激しくなった（図-1）。

3) オウトウ栽培を高めた技術開発等

加工主体で発展したオウトウ栽培から生食用栽培に変化した裏には、栽培技術の変遷も重要である。

まず、結実確保対策としては、ミツバチの導入やマメコバチの増殖・利用があげられる。特に、マメコバチは人間に危害を与えず、比較的容易に増殖できるため広い産地で導入されている。また、現在では当たり前となっている毛羽たきによる人工授粉は、昭和43年（1968）に当県農業試験場置賜分場で開発され、一般に普及したものである。

一方、オウトウは、切り口の癒合が悪く、枯れ込みが入りやすいためリング等のような徹底した整枝剪定が行われることはなく、かつ、加工原料ということから量産を主としたため、樹高が高く

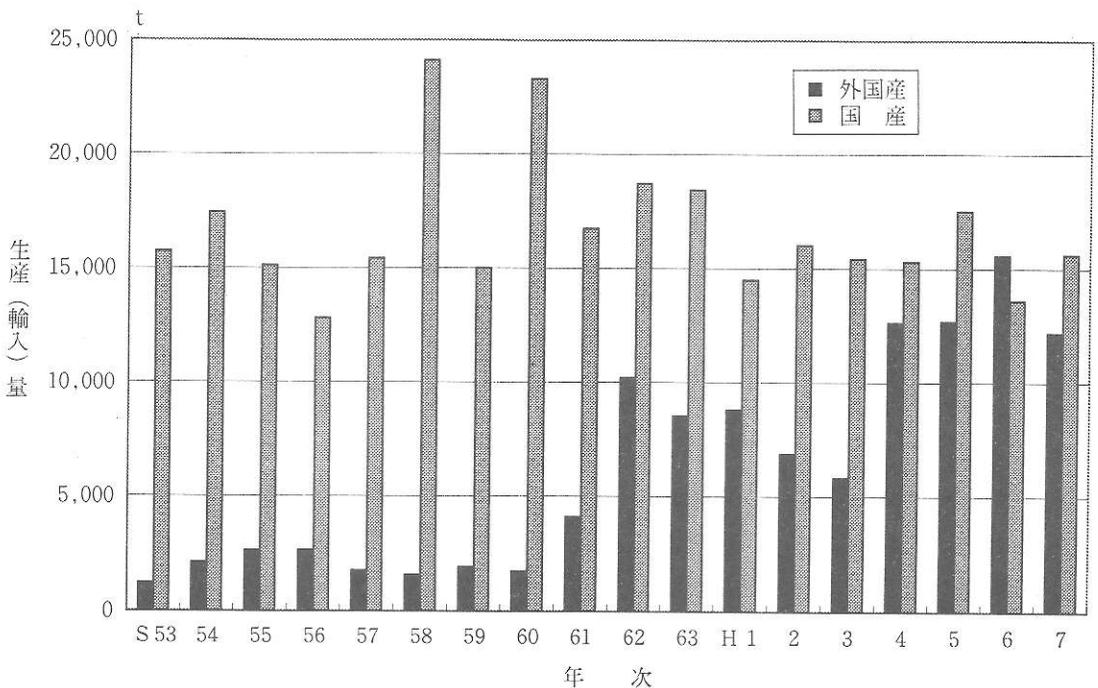


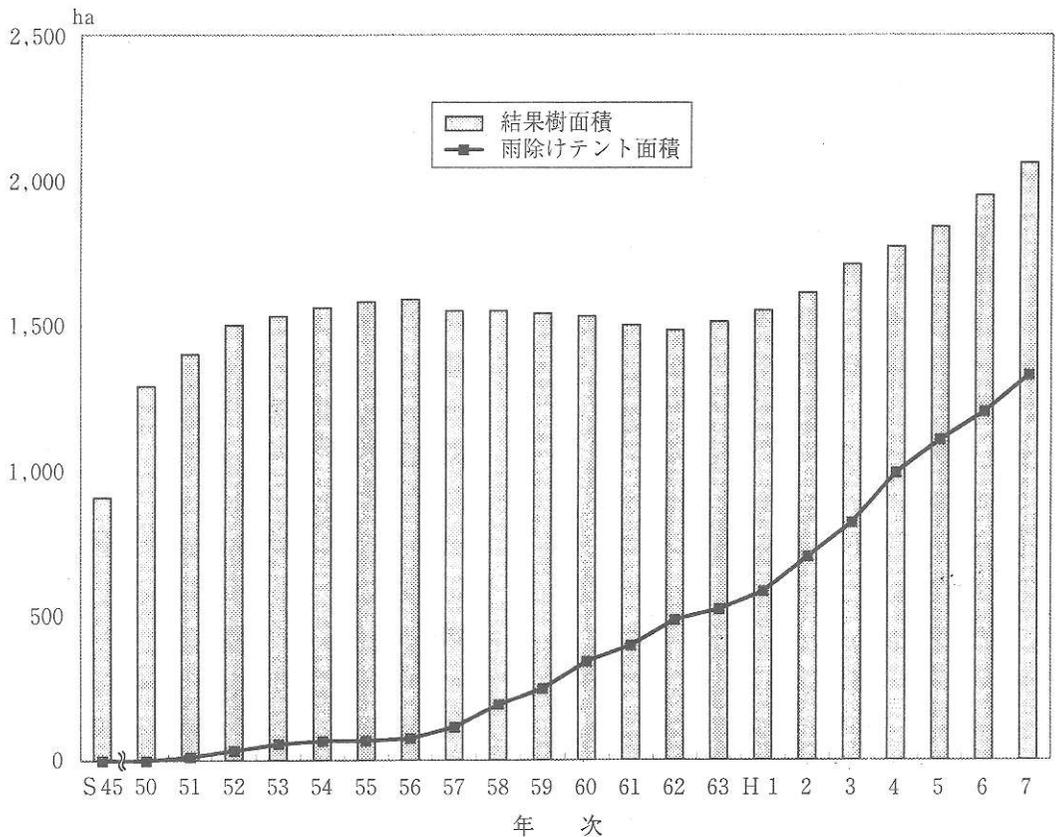
図-1 オウトウ輸入量の推移と全国の生産量（資料：農水省果樹花き課、果樹生産出荷統計）

樹冠内部は暗い状態であった。これが生食への切り替え、さらにオウトウの輸入解禁や裂果防止施設の普及に伴い、低樹高化のための整枝剪定が重視されてきた。整枝剪定は、冬期剪定のみならず、夏期剪定、さらには大玉生産のための摘蕾、摘果技術へと展開している。

加温ハウスやボックス栽培等の施設栽培も、山形、寒河江、天童等の篤農家や試験場、普及センター等の協力のもとで技術的に確立されてきており、オウトウの長期販売と経営の安定に結びついている。

オウトウがある程度安定して生産できるようになったのは、なんといっても裂果防止施設としての雨除けテントの普及によるところが大きい(図-2)。

昭和40年代の後半から50年代にかけては、テント地を巻き取り方式にした開閉式タイプが普及した。これは、テントを開いたままでは光が遮断されるので、通常は巻き取っておくため日当りは良好であるが、降雨の度に開閉が必要であり、風にも弱いという欠点があった。昭和50年代になって、パイプハウス形式の雨除けテントが考案・普及された。これは固定式で開閉の手間がいらず、強風にも強い等の点から、現在は殆どこのタイプが使用されている。雨除け施設は、多額の経費を要するため、導入する農家の殆どが農業改良資金等を利用しているが、これらに果たした行政の役割も大きい。最近のオウトウ栽培は、観光事業との結びつきによって一層の発展を見せている。



図一2 山形県における雨除けテント面積の推移(資料：山形県農業技術課、農水省果樹生産出荷統計)

(2) 山形県における産地の現状

県内のオウトウ産地は、山形盆地の中央部に位置する東根市、天童市、寒河江市を中心とする村山地域が主体であり、当地域の平成7年度の収穫量は11,200tを示し、県全体の約94%を占めている。

以下に、古くからのオウトウ産地である寒河江市と新興産地としての庄内地区及び長井市の事例について述べる。

1) 寒河江市

寒河江市は、本県中央部の山形盆地に位置し、古くから果樹栽培が盛んであり、平成7年度の果樹栽培面積は931haを有している。特に、オウトウ栽培は県内有数の産地で、平成7年度の生産量は380tを示し、県全体の18.5%を占める。市内には、古くから県内大手の加工業者など数社が操業しており、地元からの安定した加工原料の供給により地域産業の発展に大きく寄与してきた。

当市のオウトウ栽培の技術水準は高く、オウトウのハウス栽培やボックス栽培等を県内でもいち早く取り入れるなど、県内の技術普及の先駆けとなっている。最近では、ハウスボックス栽培、露地ハウス（成木）栽培、露地雨除け栽培等による長期間のオウトウ生産を行う専業農家も出てきている。

一方、オウトウは観光面でも大きなウエイトを占め、毎年6月になると「寒河江温泉とサクランボ祭り」をメインとし、市民一体となってサクランボ祭りが開催され、各種イベントが行われている。また、同時期には観光果樹園も開設され、オウトウをテーマにした「チェリーランド」等も設立されていて、6月中、下旬のシーズンには、車も大渋滞するほどの賑わいを見せている。

2) 長井市

長井市は水稻主体の地域で、果樹の生産額は農

業生産額の4%(平成6年)と少なく、この中にはオウトウの生産額が、まだ含まれない現状にある。

一方、長井市は「アヤメ祭り」や「ツツジ祭り」等の花をテーマにした花の町としてのイベントも盛んである。

市では、農業生産額の向上を計るべく、平成2年度から「40万人の観光客の訪れるアヤメ観光とのダブル観光開発」のテーマのもとに、長井市サクランボ産地形成推進事業を市の単独事業として実施した。この事業は、ハード部分となる基盤整備や、苗木購入、雨除けテントの設置等に対して、市が10aあたり年間6万円助成するというものであり、これに、ソフト面の産地形成指導として、普及センターの生産者育成や個別濃密指導が加わった。その結果、平成8年度までに12haほどの植栽が行われたが、結実を開始してまだ日が浅く、今後、いかに定着、発展させるかが鍵となっている。

3) 庄内地区

庄内地区は、当県の日本海側に位置する鶴岡市、酒田市等2市4町からなり、庄内米の銘柄があるように古くからの米作地帯である。園芸関係では、砂丘地を利用したメロン栽培や庄内柿（平核無）、和梨の産地であるが、オウトウ栽培は、導入後10年足らずの新興産地である。平成3年の庄内空港の開設もあり、最近ではオウトウ栽培も盛んになってきた。

当地区におけるオウトウ栽培上の最大の問題点は、結実しにくいという点にある。これは、内陸との開花時期の違いや強風も多いなどから、内陸での栽培技術をそのまま適応出来ない点が考えられる。そこで、当地区の生産者、庄内支庁、砂丘地農業試験場、庄内経済連が一体となり、平成6年度に「庄内サクランボ研究会」を発足させ取り組みを始めている。その活動内容は、栽培技術研

究展示圃を開設し、栽培技術の統一や共販体制を推進しようとするもので、役員を各地区から出すなど、地域全体の調和を図っている。

庄内地区は、農業に関しての先進的気風の高い地区なので、今後の発展が大いに期待される。

4. おわりに

オウトウ栽培は20年程前と比べて、格段の変化と技術革新が行われ、ある程度の安定生産が可能となってきたが、栽培上にはまだ多くの問題をかかえている。また、オウトウは高価であると言われているが、実際に栽培してみると、経費や手

間のかかる果樹であり、納得がいく点もある。

オウトウの輸入量が国産オウトウと同量になり、しかも、国内産オウトウの出荷は、北海道から関西までの範囲で、ミカンやリンゴのように、全国的に行き渡っていない現状にある。

一方、欧米におけるオウトウのルーツをみると、日本のように生活からかけ離れたものでなく身近なものになっているようである。我が国においても、旬のイメージを残しつつ、価格の引き下げ等が必要であり、このための努力を流通技術を含めて、恵まれた自然環境のもとで県一団となって努力していきたい。

引 用 文 献

- 1) Iezzoni, A.; H. Schmidt and A. Albertini, 1991. In Genetic Resources of Temperate Fruit and Nut Crops, Moor J.M. and J.R. Ballington Jr. (ed.), ISHS, Wageningen, pp.129-131
- 2) 日本園芸雑誌編 .1910. 桜桃品種名称一定会 . 日本園芸雑誌 .22(7):63-71
- 3) 日本園芸雑誌編 .1911. 第2回桜桃品種名称一定会 . 日本園芸雑誌 .23(7):51-62
- 4) 岡田東作 .1954. 桜桃の品種 . 中島天香園 . 山形
- 5) Pennell, D.; P.B. Dodd.; A.D. Webster and P. Matthews, 1983. The effect of species and hybrid rootstocks on the growth and cropping of Merton Glory and Merton Biggarreau sweet cherries (*Prunus Avium L.*), *J.Hort.Sci.*, 58:51-61
- 6) Trefois, R.; 1985. Dwarfing rootstocks for sweet cherries, *Acta Hort.* 169: 147-155
- 7) 山形県立農事試験場編 .1923. 桜桃品種試験成績 第2. 山形県立農事試験場特別報告第5号 . 山形県立農事試験場
- 8) Ystaas, J.; R.D. Way; K.G. Livermore and R.C. Lamb. 1982. 'Kristin' sweet cherry. *HortScience*. 17:986-987